

大学時代のことを思いだすとき、いつもうなだれてしまします。

なにしろ、在学中、かなり勉強をしなかったからです。

勉強をしないで何をしていたかといえば、授業をさぼって図書館に行きいちにちじゅう本を読んでいたり、池袋にある名画座にいちにちじゅう入り浸って映画を見ていたり、いちにちじゅうサークルの部室にこもってうだうだしたりしていたり、していたのでした。

今の学生さんたちからみると、まったくもってダメすぎる学生だったと思います。といって、当時は「小説家になりたい」というほどの気概もなく、ともかく、きちんと学問に向かい合うことから逃げてつづけていたのでありました。

四年生になると、生物科の卒業研究があり、研究室に属してずっと実験をするのですが、ここでも、ろくな結果を出せず、今記憶にあるのは、「研究室でおでんを煮た」「研究室でラーメンをつくって食べた」「隣の研究室の先生が釣ってきたフグを料理してくださって、みんなでおそろおそろ食べた」といった、「食い意地」にまつわることばかりです。

このようなページに「生物科のすすめ」を書くということ自体が申し訳ない、という気持ちでいっぱいになってしまいうような学生だったわけです。

ただ、もしかすると、と思うこともあるのです。

せっかくの四年間を、ほんとうに無為に過ごしてしまった。という悔恨が、そののちわたしに小説を書かせたのかもしれない、とも思うのです。

何かをなし得なかった、という後悔は、とても苦いものですし、取り返しのつかないものでもあります。でも、だからこそ、自分のダメさ加減に気がつき、そのダメな自分でもできることを、大学卒業後十何年かかけて、手探りで探していったのではなかったのでしょうか。そうやって、小説家という場所に、たどりついたのではなかったのでしょうか。

自己正当化のようなことを言っている気もしますが、お茶大の、まわりの友だちが、ほんとうに熱心に楽しそうに生物学という学問をおさめていたからこそ、この後悔があったともいえます。お茶大生は、良くも悪くも真面目です。この年になってみると、その真面目さがどんなにか得がたいものかということがよくわかります。お茶大に入学し、その環境に身を置くからこそ、真面目になるのか。それとも、そもそも真面目なタイプが、お茶大という大学をめざしがちなのか。そのあたりのことはわかりません。真面目な中にも、ひそかなユーモアをもつ生物科の友だちたちの顔を、卒業後三十年以上たったこの頃、わたしはほんとうになつかしく思いだすことが多いのです。